プロローグ

おお、いらっしゃい。こんにちは。

さあさあ　あがりなさい

初めまして、ワシの名前は “インダガ”。
いや、正確にはそれはワシの本当の名前ではなく、かつての教え子につけられた名前だな　うん。

もう随分と昔になるが一度イタリアの大学で教授をしておってな、
当時は毎日研究に追われておった。

そんなワシを見た教え子の一人が、イタリア語で「調べる」という意味の言葉、“インダガ”という言葉でワシを呼んだんだ。

研究が好きだったワシは、インダガというあだ名をえらく気に入った。
まるで歩く辞書みたいじゃないか。

ああ、すまないすまない
こんな話を聞きに来たんじゃぁないよな、分かっておる分かっておる。

若いころ、ワシは世界中を旅してまわりながらありとあらゆることを勉強していた。
様々な国、町、村に出向いたワシは
現地に住む彼らの文化や文明、知恵や知識を学ぶことができたんじゃ。

極寒の地で漁をする方法、植物から毒を抜く方法。

旅が終わるころワシは周りの人間から“知恵の人”、そう呼ばれるようになった。
世界中を渡り歩き、多くを学び、沢山の知恵を手に入れたからじゃ。

すると、いつしかワシのもとに
その知恵を借りにくる者達が出てきた。

そこでワシは
自分の持ちうるすべての知恵と知識を彼らに与えることにした。

水不足に困っていた村には水車を置いて川の水を村全体に行き渡らせたり、
野菜の育ちが悪いという悩みを抱えた村に出向いては一緒に肥料を作ったり。

じゃがある日、ある一人の男が持ってきた悩みにワシははじめて頭を抱えることになったのじゃ。

それは、「町の住民たちの “会話” を増やしてくれ」とのことだった。

話を聞くとどうやらその町の者たちはもともと恥ずかしがりやだそうでな、故に住民同士での会話が極端に少なく、町はいつも静まり返っておるそうだ。

そこでワシは考えた、持てるすべての知恵と知識を使って。

だが答えはすぐには出なかった。なぜならこんな悩みは初めてだったからだ。

煮詰まったワシは家を出て気分転換をすることにした。町を歩きながら解決策を考えておったら、いつの間にか町の東側にある野球場まで来てしまっていた。少年野球の球場だ。

客席には選手たちの家族と思われる人がちらほら。

そこでワシはあるものを目にして、ついにひらめいたんだ！
村人たちの会話を増やす画期的な方法を！

ワシが見たのは、客席を歩き回る「売り子」だった。
そうだ、お菓子や飲み物を箱に入れて売っているあの売り子だ。

そこでワシは思った、
村人が恥ずかしがり屋ということは、お互いのことをまだあまり知らないからだ。
だから売り子のように村人全員が箱を持ち歩いて、その中に一人一人が自分をあらわすものを入れれば目で見て相手のことがわかるようになる。

会話をする前に、相手のことがわかるというわけだ。
そうすれば村人たちはお互いに興味を持ち始めて会話を生むきっかけになるにちがいない。

ワシは急いで家に帰って考えを膨らませた。
箱の中身は、その人の今までの人生の記憶や思い出の品だ。
自分がどういう人間なのかを正確に伝える品。

我ながらいいアイディアであろう。

だがただの箱を持ち運ぶだけじゃあそれこそただの売り子だ。
そこで考えた
そもそも自分の宝物や自分の秘密、
記憶を保管しておく場所といえばどこじゃろう。

この答えはすんなりと出た、

引き出しじゃよ。
そうじゃ机の下やタンスについているあの引き出しじゃ。

子供のころのおもちゃ、大事な書類、悪かった点のテスト
ワシは　これじゃ　と思った。

早速その日のうちにワシは男に手紙を書いた。
町全体を変える大きな一歩になると確信しておったワシは、普段はせんのだが
張り切って封筒に「プロジェクト名」を書いたんだ。

その名も、
プロジェクト「記憶の引き出し」

翌朝早朝にワシは手紙を出した。
なにせあの男の住んで居る町は人里離れておるからな、返事が来るまでに3週間はかかった。
じゃが受け取った手紙には「素晴らしい知恵ありがとうございます、早速試してみます」と書いてあったから、手紙が届いたころにはプロジェクト記憶の引き出しは始動しておったのだろう。

それから２年ほどが経って、一通の封筒が届いたんじゃ。
差出人はあの町の男、の奥さんだった。
封筒を開けて中身を確認すると、そこには一冊のノートが入っておった。

表紙にはあの男の名前が書いてある、どうやら日記のようだ。
私はノートを開いて、彼が書いた文章を読み進めていった。

○月○日
世界中を旅してまわった知恵の人に相談してみよう。あの方ならどうにかしてくれるはずだ。

日記は、ワシの所に相談に来る数週間前からつづられていた。どうやら彼の町の問題を、一つのノートに日記として書き記していたようだ。

×月×日
知恵の人に相談しに行った。どうやら今までにない悩みだったらしく、時間がかかるらしい。
だが彼なら必ず素晴らしい解決方法を思いついてくれるだろう。

△月△日
知恵の人から手紙が届いた！本当にすごい方だ、この方法なら必ず町をにぎやかにすることができるだろう。
プロジェクト名「記憶の引き出し」、始動だ。

どんどん読み進めていった。

日記を読む限り、プロジェクトは順調に進んでいるようだった。
住民たちは少しずつ自分の引き出しを手にし、町に繰り出していったらしい。

自分の思い出の品を入れ、まるでカードゲームをする子供のようにお互いの宝物や、時には自分の秘密を共有していった。

☆月☆日
プロジェクトは大成功だ！今や町中の人が自分の引き出しを持っていて、町中に話し声や笑い声があふれかえっている！

そう書いてあった。
私は、とてもうれしかった！遠い町の問題を解決できたのだから。

そこから少し日にちが開いて、数週間後にまた日記は始まっていた。

だが
それがノートにある最後の日記だった。

□月□日
町がまた静かになった。
今まで聞こえていた話し声も笑い声も、全てが消えた。

町が、また静寂に包まれた。

人間というのは、どうも思うようにいかない。

彼らは、相手の引き出しに興味を持つのをやめて
いつしか自分の持ち物ばかりを気にするようになったんだ。

自分が相手にどう見られているのかばかりを気にして、他の人が見えなくなっている。
だからだろうか、最近町では交通事故が頻発している。
あらかた車の運転中に自分の引き出しでもあさくっているんだろう。
自分のことは大切に守っておきながら他人のことは平気で傷つけている。

どうせ最後には自分だけがかわいいんだ。

一番醜いのは
みんながみんな自分のことばかり気にしていたら
引き出しを見てくれる人はいないということに気づかないことだ。

もう疲れた。
知恵の人には悪いが、この暗闇の中を照らしてくれた一筋の光は
村人の心に届かなかった。

明日、町に移動サーカスが来る。久しぶりに家族で息抜きに行ってみよう。
息子も喜んでくれるだろう。

これを最後に、日記は終わっていた。
ワシは、大きな間違いを犯してしまった。人間というものの本質を忘れておったのじゃ。

嫉妬、恨み、憎み
これらがある限り人間は「他人より優れた人間」になりたがる。
思えばワシもそうなのかもしれない。
世界中を旅して、誰よりも多くの知恵と知識を手に入れたかった。

プロジェクトは、失敗に終わったんじゃ。

ノートを封筒に戻そうと封筒を持ち上げたとき
中から三つ折りになった紙が出てきた。
私は床に落ちた紙を拾って、ゆっくりと開いてみた。

それは、さっきのノートとは違う字で書かれた一通の手紙だった。あいつの奥さんが書いたものだろう。

そしてその手紙の内容は、私の心を容赦なく
握りつぶした。

“拝啓、知恵の人

初めまして、プロジェクトの依頼主の妻です。
まず、私たちの町の改善に尽力していただきありがとうございました。
町には会話が増え、とても賑やかな場所になりました。
しかし、それらが日常になることはありませんでした。
詳しいことは主人の日記をお読みください。

プロジェクトが始動して約2年がたったころから町にはまた静寂が広がりました。
楽し気な話し声も笑い声も、全てが消えたのです。

ある日この現状に嫌気がさした主人は、私と４歳の息子を移動サーカスに連れて行ってくれました。
私たち家族は一人一人引きだしを手にして歩いて会場へと向かいました。

会場にはたくさんの人がいたのですが、みんな自分の引き出しに夢中で人ごみの中でも静まり返っています。
すり鉢状に並んだ座席は瞬く間に埋まっていき、いよいよショーが始まりました。

綱渡り、空中ブランコ、玉乗り

数々の大技を決める演者やピエロたちを尻目に、会場は静まり返っています。
みんな自分のことで忙しいのです。

ショーが終わっても会場は静かなままでした。
拍手と歓声を上げていたのは私たち家族だけでした。すると客席に座っていた他の客たちが私たちを刺すようににらんできたのです。まるで自分たちと違う私たちを差別するような目で。

その空間に居心地の悪さを感じた私たちはそのあとすぐに会場を後にしました。

家に帰りながら私たちは
「この町に自分たちの居場所はない」
そう思いました。

自分のことばかりに気を取られて他人に興味がない
自分と違う人間を見下し、差別する

そんな人たちとは一緒に暮らす事はできません。

そして帰路も半分まで来た時

私たち家族は悲劇に襲われました。

正面から走ってきた車が、歩道を歩いていた私たち家族に衝突したのです。

私は、あの時聞こえたあの鈍い音を一生忘れる事はありません。
何かがぐしゃっと潰れたかのような音、衝撃で割れたフロントライト。

後ろに吹き飛ばされながら見えた景色は、まるでスローモーションのようにゆっくりと過ぎて行きました。
何が起きたのかわからない、頭の中はパニックです。

私は全身を強く地面に打ちつけられました。あまりの衝撃に、数秒息が止まります。

少し離れたところの地面にぐったりと横たわる二人の影が見えました。
変わり果てた二人は、私の大切な家族でした。
私は必死で地面を這い、夫と息子のもとへ向かいました。
名前を呼んでも、二人から返事はありません。
私は何度も何度も愛する家族の名前を呼びました。
名前をいくら呼んでも、体を揺さぶっても、反応はありません。
変わり果てた家族の姿を見て私は手足を震わせながら泣き叫びました。

それからのことはあまり覚えていません。

目が覚めた時
私の目に映り込んだのは真っ白な天井とポタッポタッと落ちる点滴、
私は病院のベッドの上にいました。

するとすぐ部屋に先生が入ってきて、私に状況を教えてくれました。
事故の後、私は衝撃とショックで意識を失って、そのまま病院に搬送されたようです。
そして先生は私に事故が起きた原因も教えてくれました。

話によると車の運転手はその時、
自分の引き出しを整理していて前を見ていなかったと言うのです。

私は怒りに震えました。
何の罪もない私たち家族は、自分勝手な人間によって傷つけられたのです。

ふと我に返って、私は先生に家族のことを聞きました。
大好きな夫と大好きな息子は今どうしているのか、それだけが心配でたまりませんでした。

幸い息子は自分の引き出しが壊れてしまった事以外は軽いけがで済んだようですが、

主人は
亡くなったそうです。

知恵の人、
果たして プロジェクト**“記憶の引き出し”**は正しかったのでしょうか。

町の住民の会話を増やそうと始まったこのプロジェクト
でも最終的に人々はたがいに興味を持つのをやめ、他人を傷つけ、差別し、仲間外れにしました。

私には
このプロジェクトが正しかったのかどうかわかりません。

私の家族を
返してください。

———

ワシは
とんでもないことをしてしまった。
プロジェクトは大失敗だ。

私が貸した知恵で
家族を、町を、ボロボロにしてしまった…

自分のことを
死ぬほど恨んだ。

何のために今までワシは世界中を旅して
ありとあらゆる知識と知恵を手にしてきたのか。

その手紙が届いたのは４年前、
その後町がどうなったのかはわからん。
もしかしたらまだ住民は引き出しを持っておるのかもしれん…

記憶の引き出し

あるところに
周りを大きな山で四角に囲まれた、とても小さな町がありました。

町に住んでいるのはたったの１００人。
とっても静かな小さな町。人が少ない小さな町。

でも
こんなに小さい町なのに、この町に住む人達はお互いのことをあまり知りません。

話すことも、ありません。

それもそのはず。
周りを大きな山で四角に囲まれた、この小さな町に住む人たちはみんな自分の「引き出し」の整理で忙しくて
他の人なんか知らんぷり。

引き出しあさってカタコトカタコト

下を向いてスタスタスタ

今日も町からは話し声の代わりに
引き出しを整理する音と悲しい静かな足音が聞こえてきます。

この町に住む人たちはみんな、「引き出し」を持っています。

大きさも、色も、形も、みんなバラバラ。
生まれたての赤ちゃんから腰が曲がったおじいちゃんまで、
ひとりひとり引き出しを持っています。

引き出しの中身は記憶のかたまり、
持ち主の記憶や思い出が形となって入っています。

凄腕クックの引き出しにはピカピカフォークとまんまるお皿。
天才絵描きの引き出しには穴あきベレー帽とボロボロキャンバス。

引き出しの中を見れば、持ち主のことを教えてくれます。

でも、町でただ一人
ピエロのリコルドだけは自分の引き出しを持っていません。
リコルドだけは、みんなと違います。

リコルドはひょろっと背が高い
頭はボサボサ、ホウキのようで
傾いた帽子にあいた穴からチョロッと飛び出てる。

目の下には涙のしずくがポロリ、
鼻は真っ赤なトマトのよう。

そんな引き出しを持っていないリコルドを、町の人達は気味悪がって近づこうとしません。
だから広場ではいつも一人でショーをしています。

毎日すっからかんの客席、
それでもリコルドは毎日笑顔でショーをします。

ある日リコルドがいつものようにショーをしていると、
少し遠くに生えている木の後ろから
こちらを見る一人の男の子と目が合いました。

すると男の子はビクッと驚いて、そのままくるっと振り返ったかと思うと
逃げるようにしてその場をあとにしました。

「おいおい、逃げなくたってもいいじゃないか」
リコルドは寂しそうに言うと、また一人でショーを始めました。

次の日もリコルドはいつものように広場でショーをしていました。
すると、また少し遠くの木の陰からこちらを見つめる男の子を見つけます。昨日の子です。

「やあやあ少年！僕はリコルド！世界一のピエロさ！君の名前は？」
また逃げられる前に、リコルドは大きな声で男の子を呼びました。

すると男の子は一瞬ためらいましたが、ゆっくりと木の陰から出てきてくれました。

少し近くまで来ると男の子は恥ずかしそうに、
「ぼ、僕はサム

サム・クロック…
８歳…」
と、名前と年齢を教えてくれました。

サムはとても小柄で、短いオレンジの髪の毛をしている男の子でした。
手にはこの町の住民のだれもが持っている引き出しを持っています。
唯一ほかの人と違うところといえば、
サムの引き出しはとても小さかったのです。

「サム・クロック
とてもいい名前だね！はじめまして、僕はピエロのリコルド！」

リコルドがまた元気な声で自己紹介をしたかと思うと、
今度は手を差し出してサムに握手をしようとしました。
すると、サムはキョロキョロと周りを見回してから
手に持っていた引き出しを地面において、リコルドに握手をしました。

「うん
よ、よろしく….

リコルドはさ、その…

なんでいつもショーをしているの？
いつも一人でさ、こんなところで。
それに、誰も見てないし…」

地面に置いていた引き出しを大事そうに持ち上げながら聞きました。

「そんなこと決まってるだろう！楽しいからさ！」

ポケットからりんごくらいの大きさの赤いボールを３個出してきました。

「よーく見てるんだよ
それ！」
リコルドが手に持っていた全ての赤いボールを空高く投げあげたかと思うと、すかさずさっきまで玉乗りをしていた玉の上に飛び乗り、落ちてくる赤いボールを一つずつキャッチしてそこからなんとジャグリングを始めました。

片足を上げて足の下を通したり、左手を腰に当てて右手だけでボールを回したり。

今までずっと町の人達から気味悪がられ、仲間外れにされてきたリコルドは
初めてのお客さんのためにサムにこれでもかと芸を披露しました。

最後はまたボールを空高くあげたかと思うと、そのままリコルドもボールからジャンプをして空中でクルッと回って地面に着地しました。体操選手のように両手を上げて着地した後、自分のズボンのポケットを広げて器用にボールをキャッチしました。

「す、すごいよリコルド！！かっこいい！」
サムが拍手をしながら興奮気味に言うと、
リコルドは顔を赤くして照れくさそうに自分の鼻の下に指を置きました。

「へへへ
どんなもんだい！
少しは僕がいつも芸をする意味がわかったかな？」

「うん！」

二人は、そのまま日が暮れるまで話をしたり、
リコルドに教えてもらって一緒に芸をしました。

少し暗くなってきたころで、サムがリコルドに言いました。
「ねえ、明日も来ていい？」
「もちろんさ！いつでもおいで、いつもここで待っているから」

サムはそれを聞いてにっこり笑うと、早足で広場を後にしました。
途中振り返ってリコルドに手を振ろうとしましたが、その時にはすでに彼の姿は無くなっていました。

次の日もその次の日も、サムは広場に行ってリコルドにたくさんの芸を見せてもらい、その度に二人はどんどん仲が良くなりました。

広場に通って10日くらい経ったある日、
ふとサムは今まで疑問に思ったことをリコルドに聞きました。
「ねえ、リコルドはなんで引き出しを持っていないの？」

少しため息をついたあと、リコルドが答えました。
「僕もなぜだかよくわからないんだ。覚えてないんだよ。実を言うと自分がいつ、どこからきたのかさえあまり覚えていない。
なんてったって、引き出しを持っていないからね」

記憶を形として入れておくことができる「引き出し」を持っていないリコルドは、色んなことを覚えていませんでした。

「でもね、
なぜか自分の名前と、このピエロの芸だけはしっかり覚えているんだ。
不思議だろ？
本当に大切な思い出は、ここに入ってるのかもね」
と言いながら、自分の胸を指さしました。

「ふーん」
変なの、とサムが首を傾げます。

「じゃあさ、僕が一緒に君の引き出しを探してあげるよ！二人で探したら見つかるかもしれない」

「本当に！？」
リコルドは、サムの優しさにびっくりしました。

「ありがとうサム…

僕、本当に嬉しいよ」

次の日から、リコルドの引き出し探しの冒険が始まりました。

薄暗い路地裏、公園の隅、ゴミ箱の中
サムとリコルドは街中をぐるぐる回って、引き出しを探しました。

ですが、もう随分と昔に無くした引き出しです。そう簡単に見つかるはずがありません。

引き出しを探して3日がたったある日、
街のいじめっ子達がゴミ置き場をあさっていたサムとリコルドを見つけて声をかけました。

「おいおい、
ゴミをあさってる犬がいるかと思ったらサムだったぜ。お前のその小さい引き出しの中には犬の脳みそでも入ってるのか？
それに見てみろよ、頭がおかしいピエロまでいるぜ」

「な、なんだよ。僕たちの勝手だろ」
サムが弱々しく言い返しました。

「最近よく街のゴミをあさってるみたいだな。
そんなにゴミが好きならずっとゴミと一緒にいるんだな！」

そういうと、いじめっ子たちはゴミ置き場の扉を閉じてしまいました。
「おい！出せよ！」
サムがドアを開けようとしましたが、どうやら外側から鍵がかけられていて、開きません。

薄暗くて臭いゴミ置き場の中で、リコルドとサムは弱々しく座り込みました。

「ごめんねサム
僕の引き出しだから、最初から自分一人で探せばよかったんだ。

君を巻き込んで、本当にごめん」
リコルドが申し訳なさそうにサムに言いました。

「…」
サムが少しうつむいてから話し出しました。
「僕の引き出しってさ、みんなのより
うんと小さいだろう？
だから色んな奴から馬鹿にされるんだ」

「何もおかしくないよ。
引き出しの大きさなんて関係ない」
リコルドが首を横に振ります。

「違う
みんなはもっと大きな引き出しを持ってて、いっぱい記憶とか思い出を入れてるんだ」

「大切なのは、引き出しの大きさなんかじゃなくてそこに何を入れるかなんだよ」

「引き出しすら持ってないリコルドに、何が分かるんだよ！」
サムが怒ってリコルドに怒鳴りましたが、すぐに我に帰って謝ります。

「ご、ごめん
こんなこと言うつもりじゃ…」

「…ううん

そうだよ、そうだよね
引き出しすら持ってないのに、僕が何か言える資格なんてないよね」

リコルドはゆっくり立ち上がって、ゴミ山の方まで歩いて行きました。
しゃがみ込んで少しゴミをあさると、ゴミの中からクリップを見つけました。
リコルドはそれをまっすぐに伸ばすと、

ドアの方まで歩いて行って鍵穴にクリップを差し込みました。
少しすると、ガチャっという音とともに扉が開きます。

「こう言う芸も、覚えておいたらいつかは役に立つよ」
リコルドが自分の鼻を優しく押してサムに微笑みかけます。

「ありがとう、僕の芸を褒めてくれて。
すごく嬉しかった。
二人でいた時間は本当に楽しかったよ

でも、もう会うことはないと思う
さようなら、サム」

そういうとリコルドは外に出ました。

「待って！」
サムが急いで立ち上がって、リコルドを追いかけて外にでます。
ですがサムが外に出た時には、もうリコルドの姿はありませんでした。

次の日、サムはいつもリコルドがいた広場に行ってみました。
ですがいつもはそこにいるはずのリコルドが、今日はいません。
次の日も、そのまた次の日も
サムは広場に行きましたが、背が高い赤鼻のピエロの姿はどこにもありませんでした。

リコルドがいなくなって1週間が経った頃、
町に移動サーカスがやってきました。町にはたくさんのチラシが配られて、ちょっとしたお祭り騒ぎです。

「ここに行けば、リコルドに会えるかもしれない」

それから、サムは1人でリコルドの引き出しを探し始めました。
朝から晩までサムはリコルドのために引き出しを探しますが、一向に見つかりません。

そして、とうとう引き出しは見つからないまま、サーカス当日になってしまいました。
サムが部屋でどうしようかと悩んでいると、そこにお母さんが入ってきました。

「サム、サーカスって今日よね？
お母さんこんなもの見つけちゃったんだけど、これどうしようか。」

お母さんが出してきたのは、ボロボロの紙袋でした。

「これなあに？」

「あなたは小さかったから覚えてないだろうけどね、」
お母さんが話し始めました。

「昔家族みんなでサーカスを見に行ったことがあるのよ。
そこであなたがあまりにサーカスに夢中で楽しそうだったから、
帰りにお父さんがこれをあなたのために買ってあげたのよ。
そうしたらあなた本当に喜んで、お父さんも嬉しそうだったわ。
でも、中身がどこかにいっちゃったのよね」

サムが紙袋を受け取って中身をみてみると、
そこには中身が入っていない何かのパッケージがありました。
そしてそのパッケージには、もともと中に入っていたものの写真が印刷されていました。
どうやら中にはぬいぐるみが入っていたようです。

赤い鼻、大きい靴、目の下にあるしずくの絵。

その写真のぬいぐるみは、誰かに似ていました。

間違いありません、
そのぬいぐるみは
ピエロのリコルドにそっくりだったのです。

「お、お母さん
僕、このピエロを知ってるよ」

「あら、サーカスを見に行ったことを覚えているの？」

「ううん違うんだ
僕は
このピエロ、ピエロのリコルドに会ったことがあるんだ！
いつも広場で誰も見てないのに芸をしてるピエロがいるんだ。
そいつとこのぬいぐるみがそっくりなんだよ」

お母さんがびっくりしてサムに聞きます
「本当なの？？
じゃあ、リコルドは今も広場に？」

サムが空になったパッケージを強く握って答えました。

「わからない…いなくなっちゃったんだ

僕がリコルドを傷つけてしまったから

リコルドはいつも、笑顔で僕に芸を見せてくれていたのに…」

「サム、あなたならわかるわよね」
お母さんがサムの肩に手を置いて話しかけました。

「リコルドは、あなたに気づいて欲しかったのよ。
たとえ誰も見てなくとも毎日毎日広場で芸をして、
ただ1人
たった1人

あなたに見つけてもらいたかったのよ」

気がついたら、サムの頬には涙が流れていました。
真実を知らずにリコルドを傷つけてしまったサムは、胸が締め付けられる気がしたのです。

サーカスまであと数時間、
サムはカバンにそのパッケージの箱を入れて、会場を目指しました。

予想通り、サーカスにはたくさんの人が来ていました。
色とりどりのライトに、様々な音楽。
サーカステントから漏れる光が線となって街の夜空を照らします。

町中の人が集まったのではないかと思うほどの人数に、サムは懐かしい興奮を覚えました。

ですが、みんな自分の引き出しに夢中で人ごみの中でも静まり返っています。

人混みを抜け、テントの中に入ると
テントを支える鉄パイプの横に、背の高い1人のピエロが立っているのを見つけました、
リコルドです。

「やあリコルド、久しぶり」
サムが近づいて後ろから声をかけます。
するとリコルドは一瞬ためらいましたが、振り返ってサムに挨拶をしました。
「やあサム、
君も見にきたんだね」

「うん、僕サーカスが好きなんだ

それに
ここに来たら君に会えるかと思って」

リコルドが少し間を開けて言います。
「僕、もう帰るよ

まだ引き出しも見つかってないし
それに、君と一緒にいたら
また君を傷つけてしまう」

サムはそれに返事をする代わりに、肩からかけていた鞄を開けて
パッケージの箱を取り出しました。

「リコルド、
僕ね
どうやら前にもこの移動サーカスに来たことがあるみたいなんだ」

そう言うと、サムはリコルドに箱を渡しました。

「これは…？」
「箱の裏を見てみて」

箱の裏にはリコルドそっくりなぬいぐるみの写真がありました。

「僕のお父さんがね、僕のためにこのぬいぐるみを買ってくれていたみたいなんだ。
でも、肝心な中身がどこに行ったのかがわからなくて」

「そうか…そうだったのか

もっと早く気づけばよかった…

僕が探していたのは引き出しなんかじゃなくて
サム、君だったんだね」

町中探し回っても見つからなかったリコルドの引き出し
それもそのはずです、彼が探していた「居場所」は
ずっと彼のすぐ近くにあったのですから。

「僕も今まで何か大切なことを忘れていた気がする。
今まで見つからなかったパズルの最後のピースがカチッとはまったみたいだ。

サム、僕を見つけてくれてありがとう

会いたかったよ」

そういうとリコルドは長い腕をめいいっぱい広げて、サムにハグをしました。

サーカスもいよいよ大詰め、空中ブランコできめるクライマックスに向かって順調に進んでいます。
ですが、相変わらずお客さんたちは自分の引き出しに夢中でサーカスには見向きもしません。

すると急にリコルドがサムの手を引いて、
「さあ、行こう！」

そういうとリコルドはサムの手を引いて、
今もショーの真っ最中のステージの上に駆け上っていきました。
「うわぁ！」

舞台上の演者はそりゃあもうびっくりです。
どこからともなく赤鼻のピエロとオレンジ色の髪をした少年が現れたのですから。

ですが流石はプロです。
舞台上に走り出てきたリコルドとサムを、
空中ブランコをしていたお兄さんが掴んで空高くへと投げてくれました。
二人はどんどん高く飛んでいきます。

「届けーー！！！」
空高く投げ飛ばされたリコルドはそう叫びながら天井についていたフックに手を伸ばしました。
ようやく天井まで届いたとき、
リコルドはそのフックをしっかりと握りしめて、そして力いっぱい引っ張りました。
するとカチャッという音とともに天井につるされていた大きな袋が開いて、
中からたくさんの紙吹雪が出てきました。

赤、青、黄色、緑、紫
色とりどりの紙吹雪が会場全体に舞います。

そしてその紙吹雪たちは、
今もなお下を向いている観客たちの引き出しの中にひらひらと舞い降りていきます。

すると今まで下を向いて自分の引き出しを整理していた観客達が一人、また一人と顔を上げてステージのほうを向き始めたのです。

少しすると、観客全員が自分の引き出しを触るのをやめてステージのほうを見上げていました。

「さあ、降りるよサム」
まだ空中でフックにつかまって宙ぶらりんになっていたリコルドが言いました。

「む、無理だよ！
こんなに高いところから降りれるわけがないよ！」
リコルドの腕にしがみついていたサムは
あまりの高さに恐怖を感じて、
目をぎゅっとつぶって体を震わせています。

「大丈夫だよ、怖くない。
僕を信じて。
なんて言ったって僕は世界一のピエロなんだから！」

「うぅ..」
リコルドがサムを勇気づけても、体の震えは大きくなるばかりで
目には涙を浮かべています。

するとそんな二人を見ていた観客の一人が
自分の引き出しを床に置いて、ゆっくりと立ち上がりました。
そして小さな声で

「....がんばれ」

そうつぶやきました。

「がんばれ...がんばれ...！」
声がどんどん大きくなっていきます。

「がんばれ！！大丈夫だ！君ならできる！」
その観客はとうとうめいっぱいに声を大きくして、二人を応援しはじめました。

するとどうでしょう、それを見た他のお客さんが
一人、また一人と
まるで波紋を呼ぶように次々に観客が今まで大切にしていた
引き出しを置いて、立ち上がりました。

「がんばれ！」

「自分を信じるんだ！」

会場はあっという間に二人を応援する声で埋め尽くされました。
今まで静かだった会場がうそのようです。

「サム、聞こえるかい？僕たちを応援する声だよ。

大丈夫、君ならできるさ」

サムがゆっくりと目を開けて、客席で声援を上げる観客たちを見ます。
みんな声を張り上げて、二人を勇気づけています。

するとサムはゆっくりと深呼吸をして、リコルドの目を見ました。
「…わ、わかったよ..僕、がんばる…」

「そう来なくっちゃ！」
そういうとリコルドは

パッ

とフックから手を放しました。

「うわぁああ！お、落ちるぅ！」
二人は舞い落ちる紙吹雪よりも速いスピードで地面に向かって落ちていきます。
もう少しで地面に当たっちゃう！というところで

ボスン！

リコルドとサムは下に敷いてあった大きなクッションに落下して、
なんとか地面に打ち付けられることはありませんでした。

「ハハハハハ！いやー怖かったー！どうなることかと思ったよ」
クッションに埋もれているリコルドが大きな声で笑いました。

「ちょ、ちょっとまってよ
成功する自信はなかったっていうの！？」
サムが涙目でリコルドに言います。

するとリコルドはにっこりと笑ったかと思うと、
ひとりでクッションをかき分けて外に出てしまいました。

「ちょ、ちょっと！」

サムも急いでリコルドについていきます。

「ねえリコルドってば！」
クッションをかき分けて、既にステージに立っていたリコルドを見つけて名前を呼びます。
するとその瞬間
「おおおおおお！！！！」

会場は大きな歓声に包まれました。

「よくやったぞ！頑張ったなぁ二人とも！」

「かっこよかったぞ！」

リコルドとサムはびっくりしてお互いを見つめ合うと
くすっと笑って、二人とも恥ずかしそうにしながら鼻の下に指を置きました。

まばゆいライト、沢山の紙吹雪、沢山の歓声に包まれた二人はとてもうれしそうです。
するとリコルドはサムをひょいっと持ち上げて、肩車をしました。

「サム、ありがとう
君は最高の友達だ」

次の日、町から移動サーカスはなくなっていました。次の目的地に旅立ったのでしょう。
これでまた静かな町に巻き戻り…とは、なりませんでした。
町の人たちはなんと今まで大切にしてきた自分の引き出しを捨てて、
自分のありのままの姿で町に繰り出したのです。
町の人たちは、最初は恥ずかしそうにしながらも他の人に話しかけています。

昨晩のサーカスの話、学校の話、会社の話、なんてことない世間話。

町から、静寂がなくなったのです。

そして町からなくなったものがもう一つ
それはピエロのリコルドです。
広場でいつもショーをしていたリコルドが消えた代わりに、
サムが持っていた空のパッケージの中にリコルドのぬいぐるみが入っていました。
サムに見つけてもらったから、リコルドは元の姿に戻ったのでしょう。

「え？リコルドとおしゃべりできなくなってさみしくないかだって？

大丈夫だよ、だって本当に大切な思い出はここに入ってるんだから」

そういうとサムは自分の胸を指さして、にっこりと笑いました。

完